

第2章 計画地の現状

第1節 自然的環境

1) 位置と立地

南島原市は、長崎県の南東部である島原半島に位置する。島原半島のおよそ南東部を占め、北は島原市、北西は雲仙市と接する。南東は有明海に面し、対岸に熊本県の宇土半島や天草諸島を望む位置にある（図2-1）。

原城跡は南島原市の南部に位置し、有明海に突き出した広大な台地上に築かれており、西側および北西側に一部低地が存在する。



図2-1 原城跡の位置

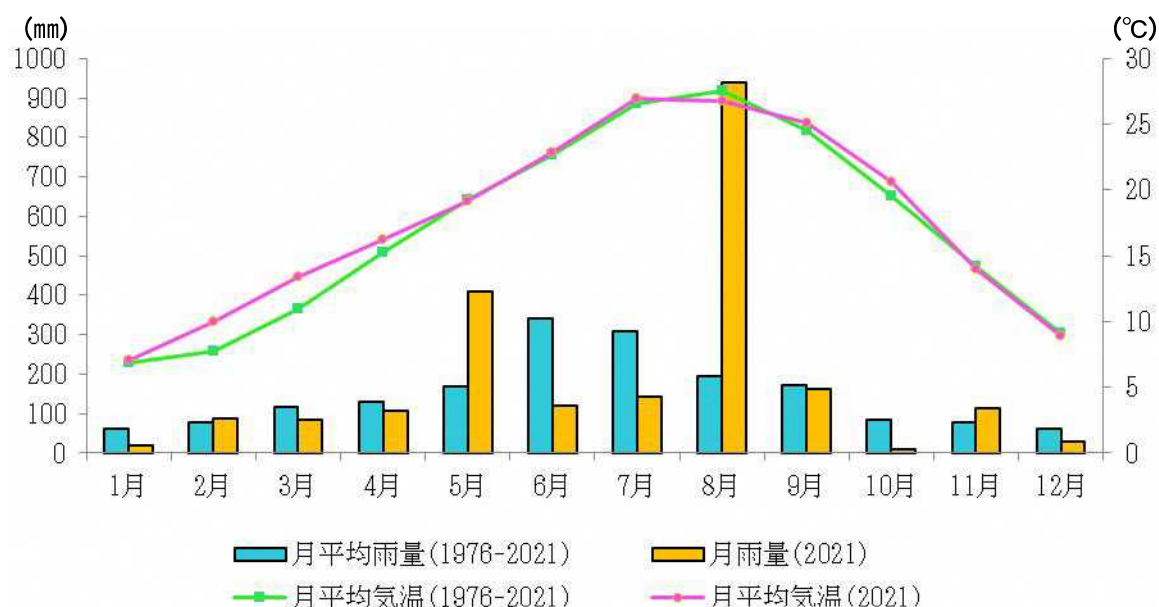
2) 気象

南島原市の気象は一年を通じて温暖であり、日照時間にも恵まれている。

季節ごとの特徴として、春から初夏にかけて月140mm程度の降雨が見られ、秋に雨量が少なくなる。また、冬季は北風を雲仙岳連山でさえぎるため風雪も少なく、寒さがそれほど厳しくないことから、年間の寒暖差もあまり大きくない。内海の有明海に面した地理的特徴も影響していると考えられる。

月別平均気温は8月が最も高く27.6°Cで最も低いのは1月の6.9°Cである（図2-2）（※）。

※数値は気象庁口之津観測所の1976～2021年の統計に基づいた。ただし気温の観測は1976年3月の開始であるため、1月および2月の平均気温は1977年～2021年の統計値による。



※数値は気象庁口之津観測所の1976～2021年の統計に基づく

図2-2 南島原市の気象

地球は現在、過去 1400 年のうちで最も気温が高くなっており、地球温暖化と呼ばれる状態にある。この地球温暖化は平均気温の上昇だけではなく、海面上昇、異常高温、大雨や干ばつの増加などの気候変化をもたらすといわれている。日本国内においても明治 31 年（1898）の統計開始以降、平均気温が変動を繰り返しながら上昇をしており、特に 1990 年代以降には高温となる年が頻出している。また気温の上昇に伴い、1 日の降水量が 100mm 以上の大雨となる日数が長期的に増加傾向であり、地球温暖化が影響している可能性がある。

南島原市においても近年は大雨が増え、また長期化するケースもあることから、土砂災害が市内各所で毎年のように発生している。原城跡では平成 26 年（2014）以降、たびたび法面の崩落が発生しており、特に令和 2 年（2020）7 月の豪雨では、期間雨量が 325.5mm を記録し、原城跡でも 22 か所の法面の崩落などのき損が発生している。

なお、原城跡におけるき損発生時の南島原市の降水量（図 2-3）をみると、一部降水量との因果関係が不明なものもあるが、き損の主な原因は一定量以上（時間雨量 20 mm/h または 24 時間連続雨量 80 mm 以上）の降水によるものと判断することができる。

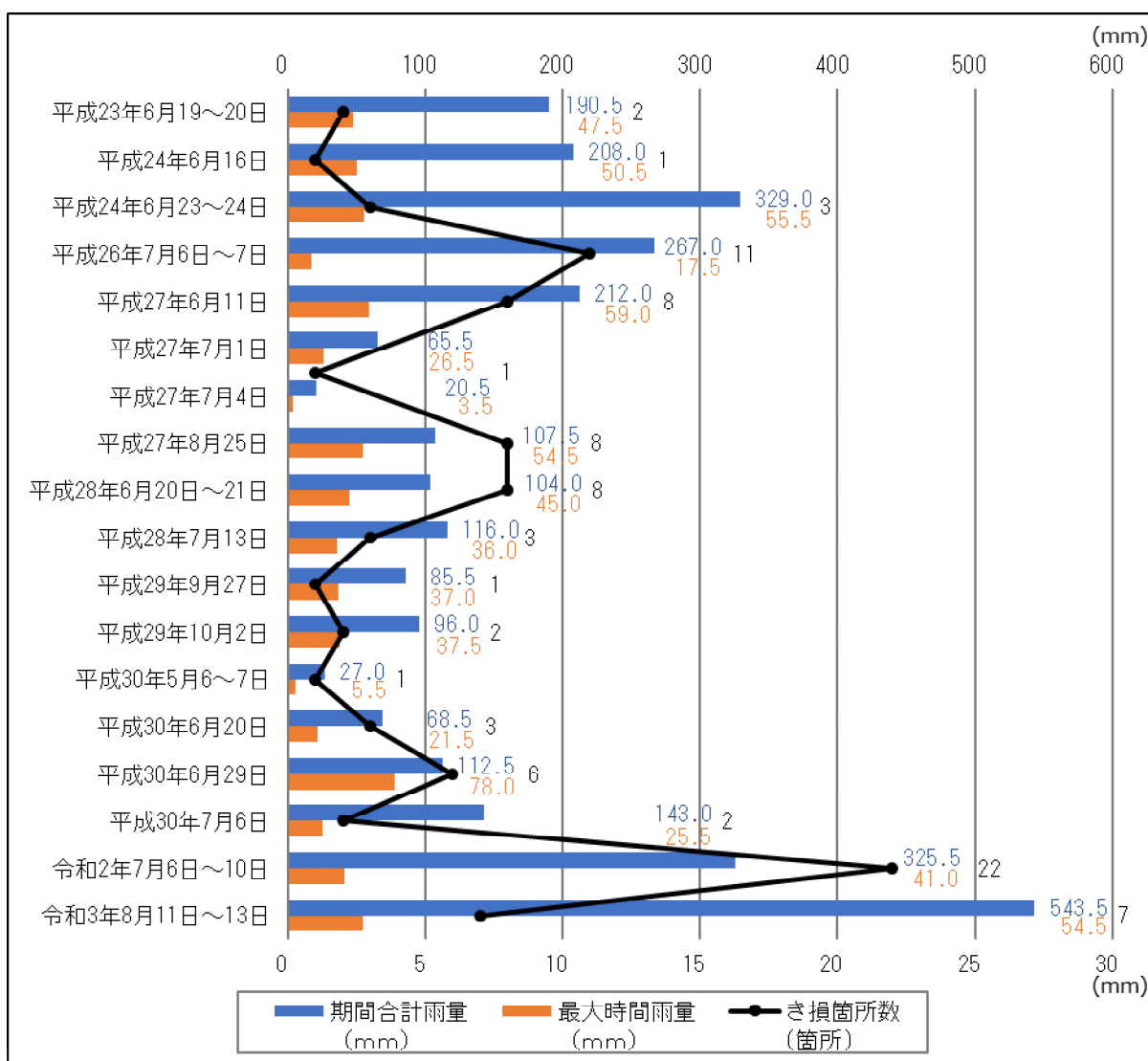


図 2-3 原城跡におけるき損発生時の南島原市の降水量

3) 地形・地質

南島原市の地形や地質は有馬川を境としてその特徴が大きく異なる。有馬川より北側の地形は平成新山を主峰とする雲仙火山の山地およびその山麓であり、扇状地が多く発達している。地質は雲仙火山のデイサイトおよび安山岩からなり、山麓では火砕流や土石流の堆積物が広がっている。

有馬川より南側の地形は鳳上岳（409.5m）と愛宕山（291.0m）および彦山（379.9m）の3つの溶岩台地が互いに離れて分布しており、地質は玄武岩および安山岩の溶岩流や火砕岩が広がっている。

市南部に所在する原城跡は、鳳上岳および上原台地の東に位置し、西の溶岩台地・山麓地から小規模な谷底平野、海岸平野を介して有明海に突出かつ独立した岩石台地に立地している。台地の標高は本丸付近が最も高く、約30mである（図2-4）。

原城跡周辺の地質構成は、礫岩・砂岩・泥岩の固結堆積物を基盤とする大屋層が主であり、溶岩台地周囲の山麓地にほぼ対応する形で広がっている。なお、この層は北側の砂岩・泥岩を主とした北有馬層とともに「口之津層群」と呼ばれている。また、台地の中ほどにある周囲より相対的に高い箇所に、軽石を含む火砕流堆積物が分布する。この層は、熊本県阿蘇山の噴火による阿蘇4火砕流堆積物であることが判っており、約9万年前のものと推定されている。また火砕流堆積物は、下層の大屋層を覆うように堆積しており、そうした状況は原城跡の海側に面した崖の露頭でも観察できる。このような地質とその見学環境は非常に貴重なものであることから、原城跡は島原半島ユネスコ世界ジオパークのジオサイトともなっている。市街地方面に広がる低地の地質は河川堆積物の礫・砂・泥などである（図2-5）。

平成22年度および平成24年度に行った原城跡本丸での地質ボーリング調査結果では、地表より0～約11mに火山灰質粘土、約11～23mに火山灰砂が堆積し、それより下には大屋層が堆積する状況であった。また、これら火山灰系土層の地盤強度がN値10以下とかなり脆弱であることも判明した。実際、原城跡本丸の海側崖面が経年的に崩落を繰り返す状況である（図2-6、図2-7、図2-8、図2-9）。なお、N値とは標準貫入試験（JIS A 1219）によって求められる地盤の強度等を求める試験結果（数値）であり、地盤の硬さや締まりの程度の評価や、基礎や地盤反力等の設計に必要な地盤定数（土質定数）の推定に利用するものである。一般に支持層は、砂層でN値30以上、粘性土でN値20以上とされている。

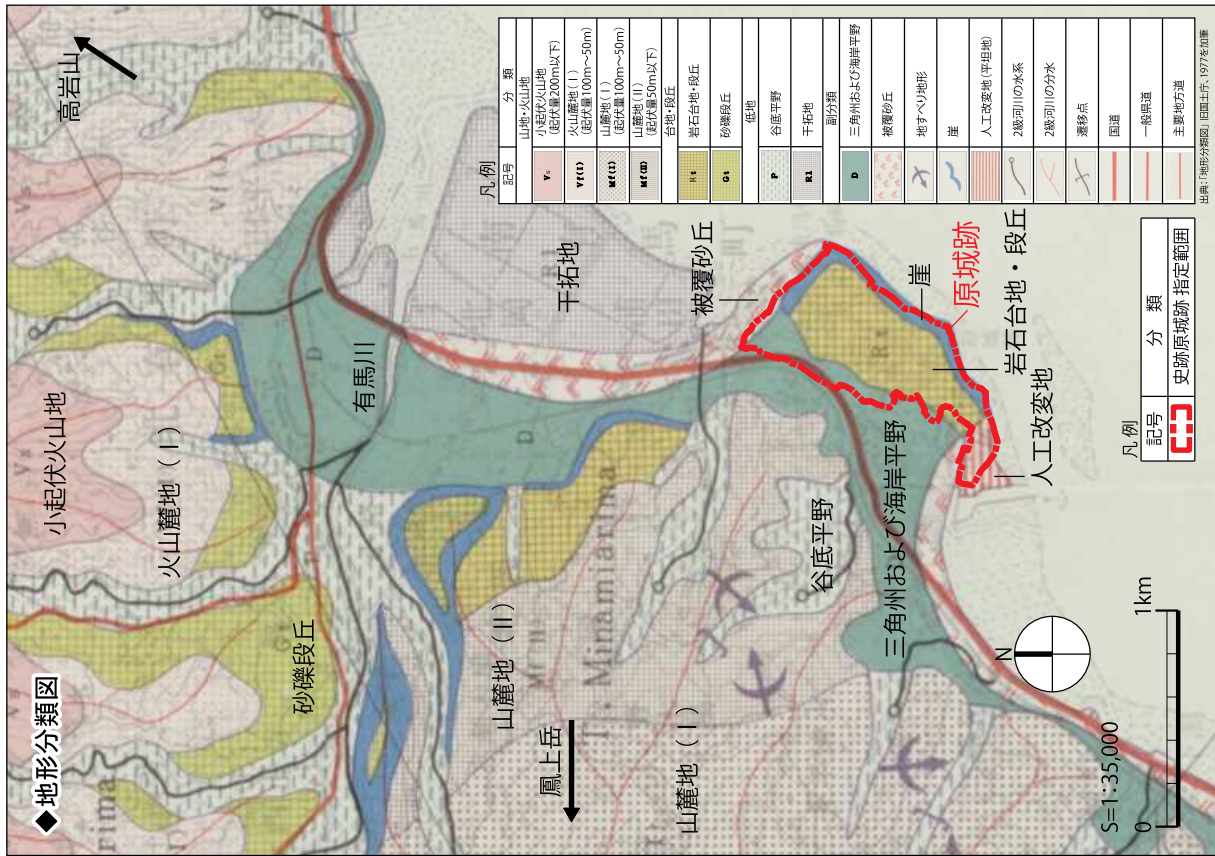


図 2-4 原城跡周辺の地形分類図

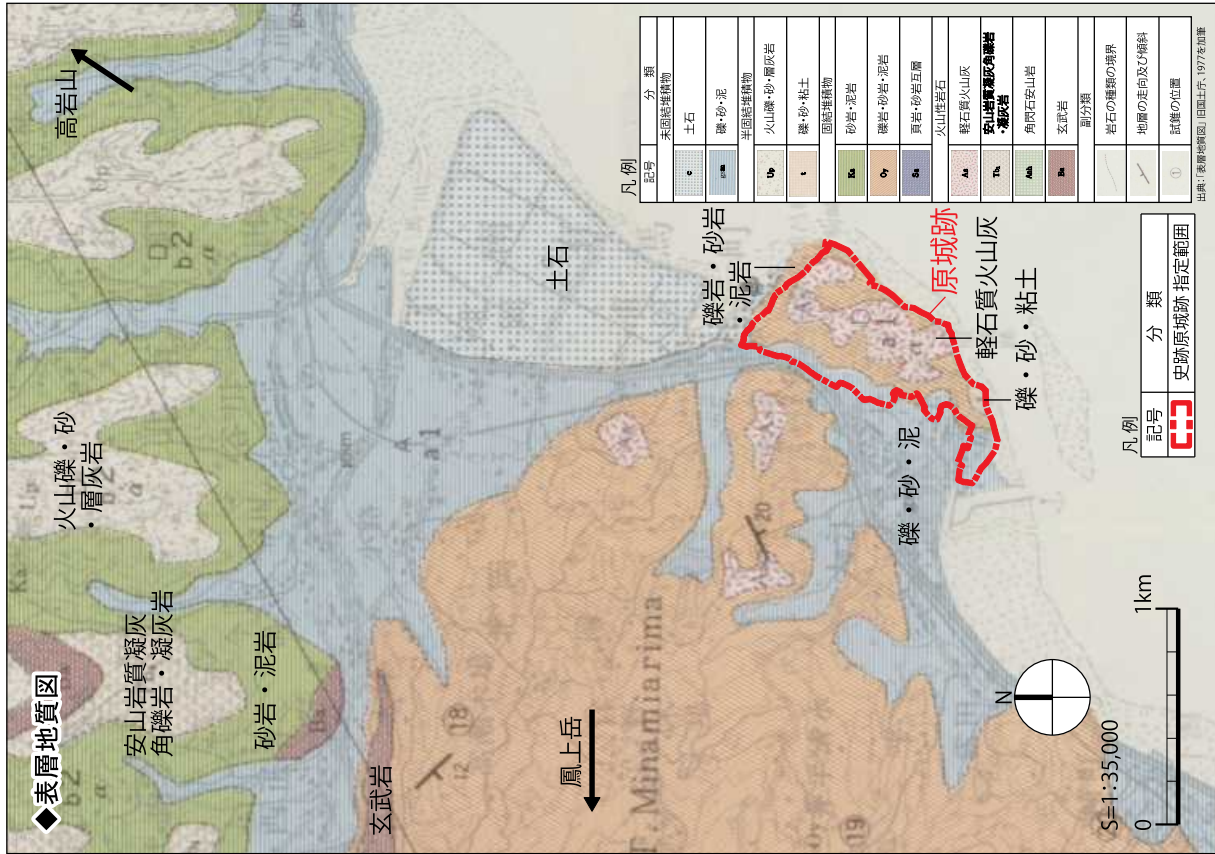


図 2-5 原城跡周辺の表層地質図

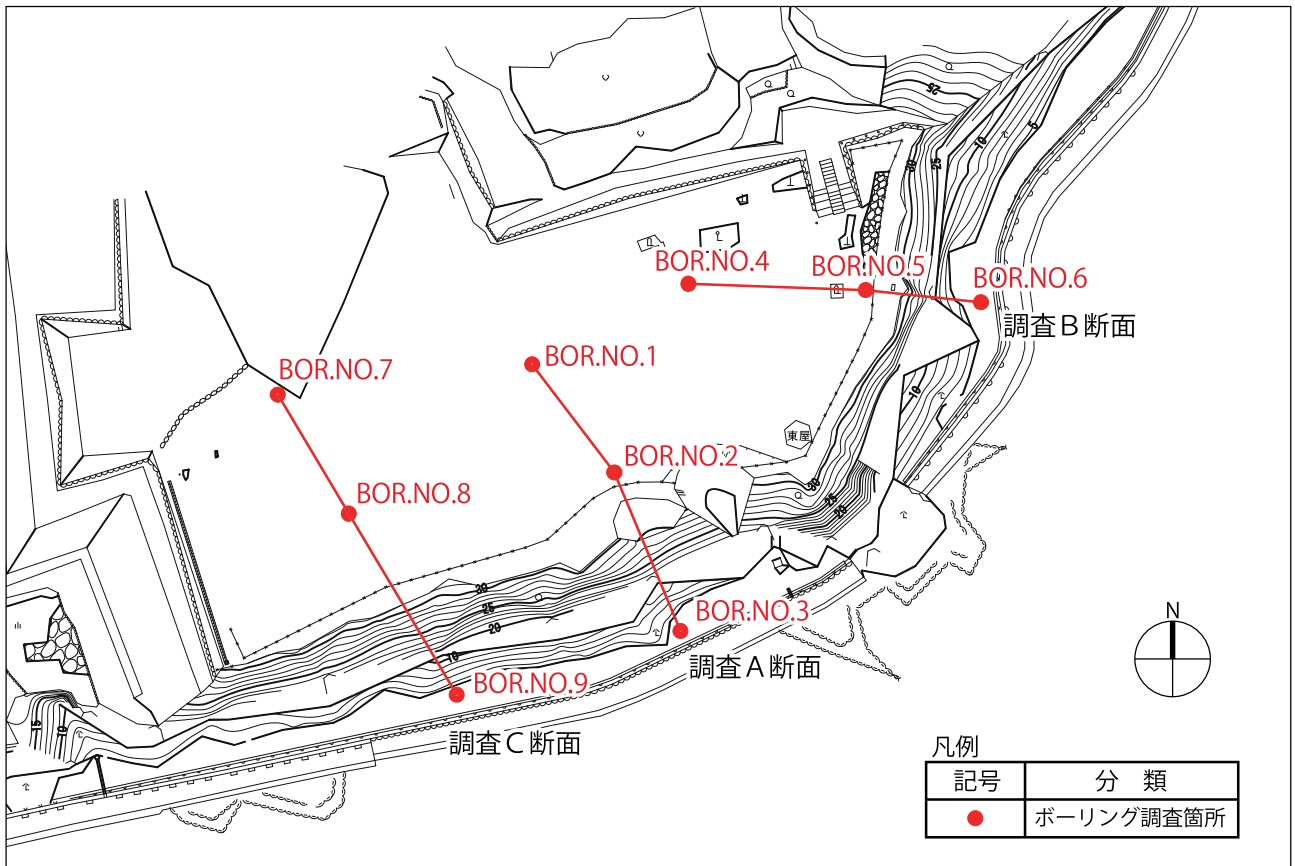


図 2-6 原城跡本丸ボーリング箇所図

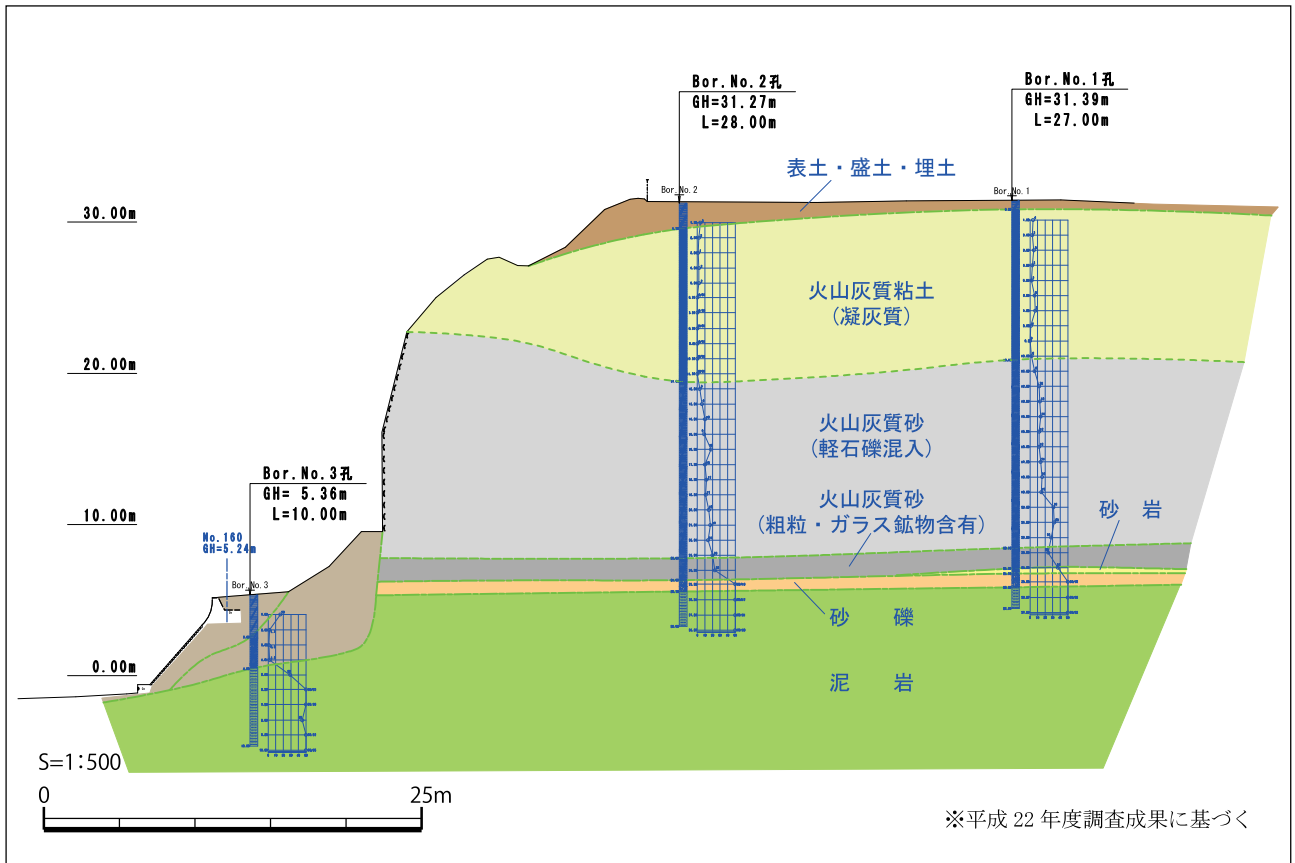


図 2-7 ボーリング調査A断面図

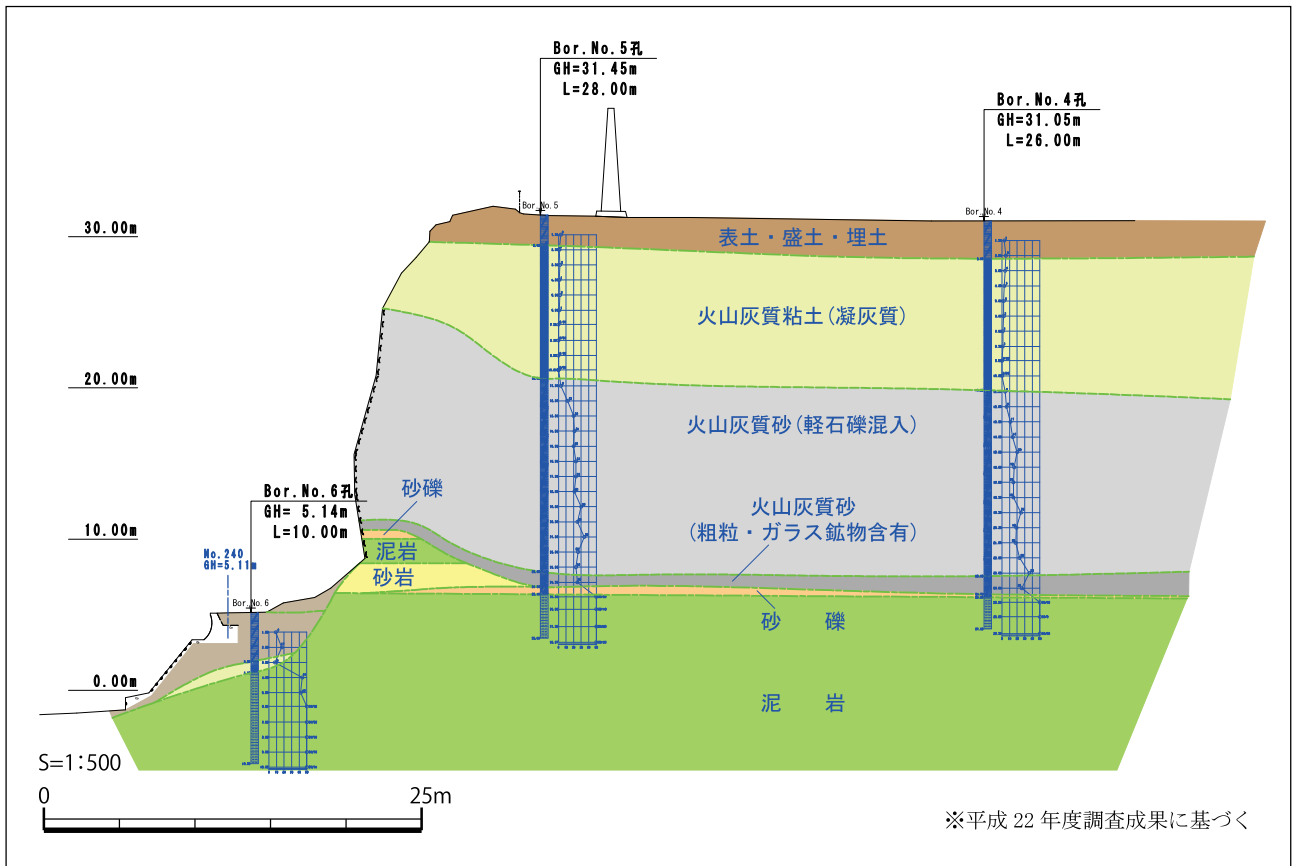


図 2-8 ボーリング調査B断面図

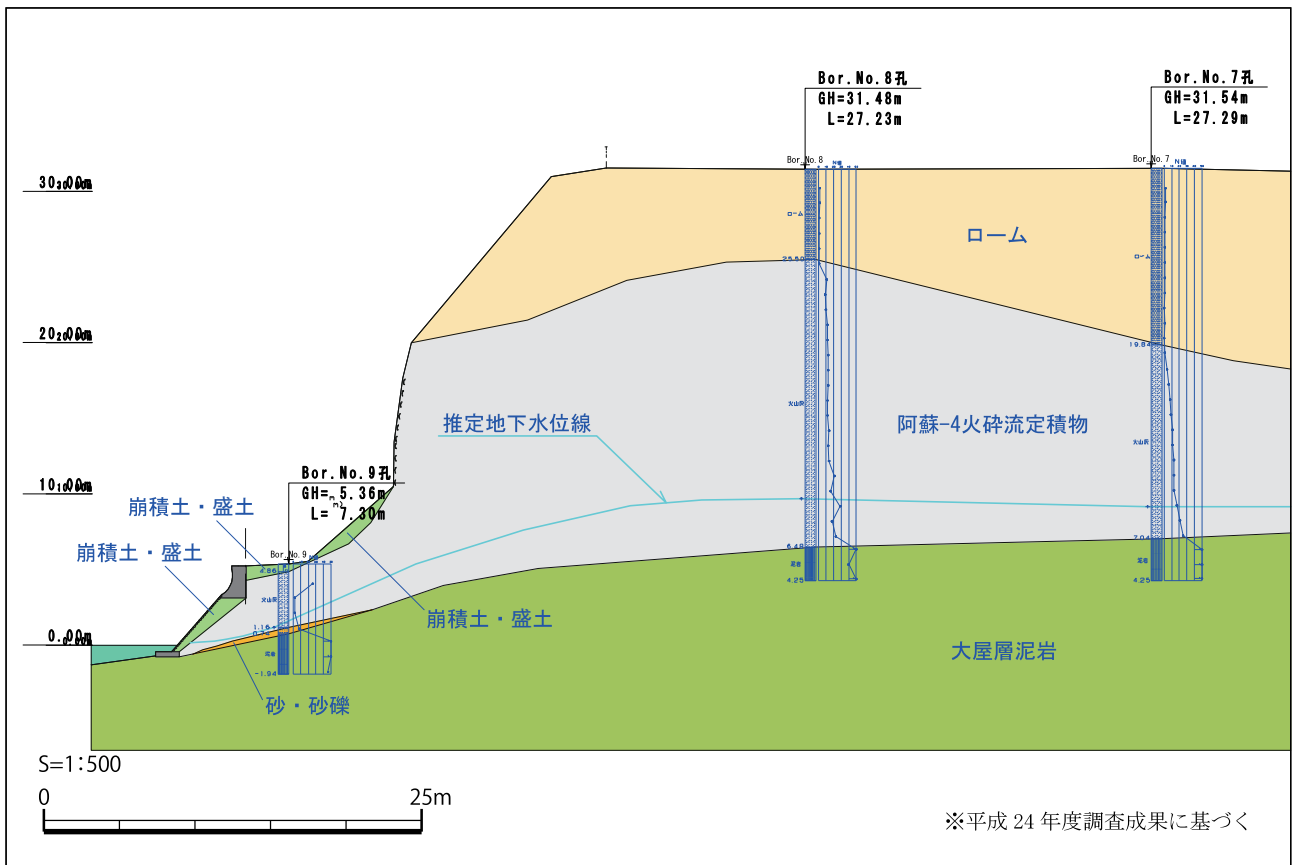


図 2-9 ボーリング調査C断面図

4) 植生

原城跡の主要な曲輪は、大部分が畑雑草群落に分類されており、二ノ丸から鳩山出丸の西側および三ノ丸北東側の崖地・斜面地にシイ・カシ二次林が分布する。また三ノ丸の南西側、台地全体の西側などの低地部には水田雑草群落広がっている。

原城跡が立地する台地周辺は谷部や低地を中心に水田雑草群落と市街地がある。丘陵状の箇所には常緑果樹が多く分布していたが、近年は減少している（図 2-10）。

なお、原城跡の植生の大部分は、島原・天草一揆後の近世および近現代に繁茂したもので史跡の本質的価値とは関わりのないものである。

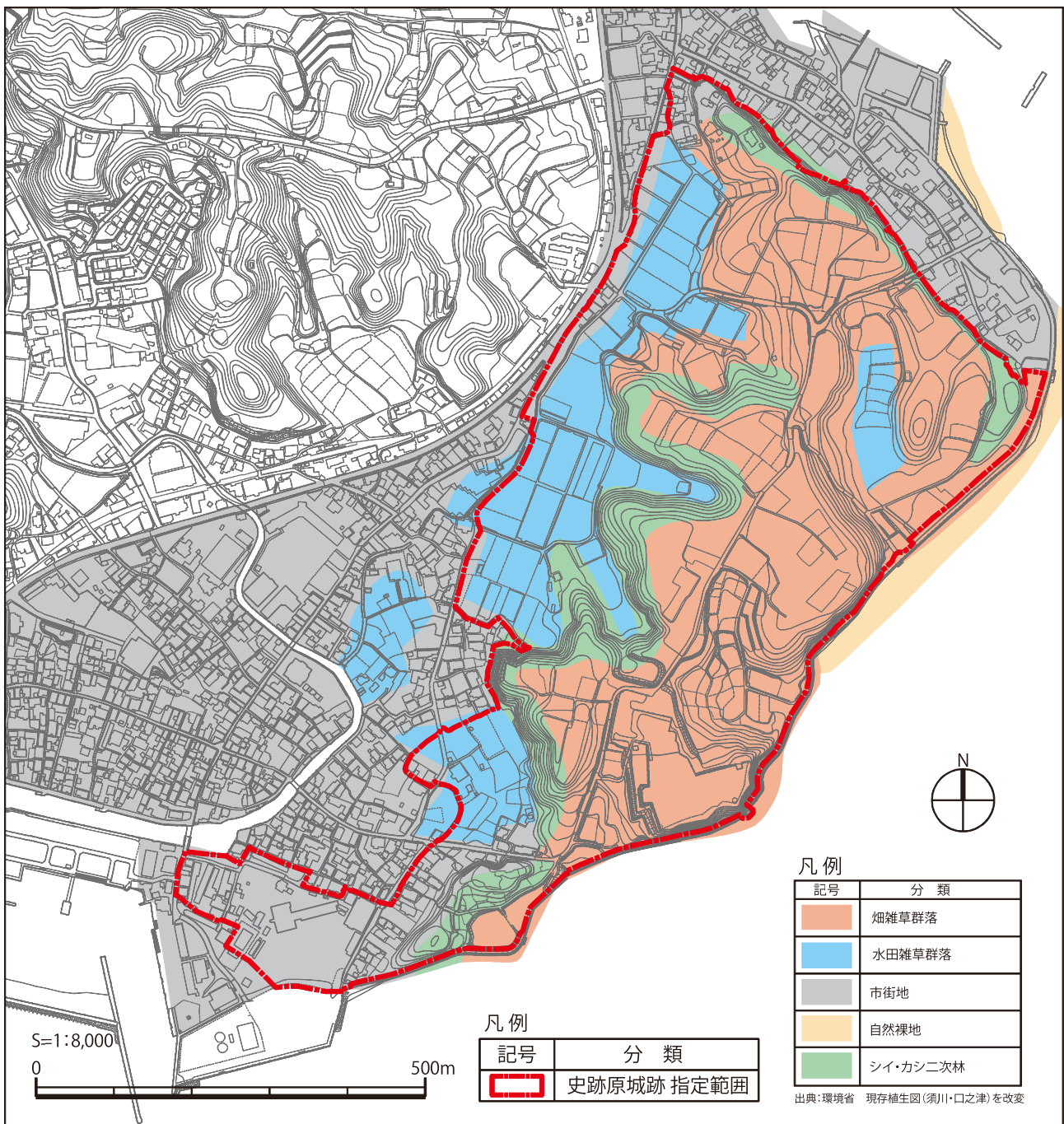


図 2-10 原城跡の植生図

5) 景観

原城跡は海に接する台地上に立地するため、海域側からの写真をみると原城跡が海を意識した構造を有することを確認することができる。本丸等の曲輪の平坦部からは、島原・天草一揆に関連が深い湯島や天草諸島を望むことができる。

二ノ丸出丸からは原城跡に関連の深い日野江城跡を望むことができ、途中には島原・天草一揆の際の幕府軍本陣跡（現在の多目的運動広場）も視認される。なお、原城跡と日野江城跡を結ぶ視軸は世界遺産の構成資産としての景観を保全していくうえで最も重要な視軸に設定されており、南島原市景観条例及び景観計画における重点地区に位置づけて厳格な景観コントロールを図っている。

他にも、二ノ丸出丸や二ノ丸、鳩山出丸からは陣跡方向への眺望や陣跡側から原城方向への眺望が開けているが、史跡内の雑木類が視界を遮っている箇所も存在する。



写真 2-1 原城跡全景（南東側上空より）



写真 2-2 原城跡本丸より天草諸島方面



写真 2-3 原城跡本丸より湯島方向



写真 2-4 二ノ丸出丸より日野江城跡方向



写真 2-5 鐘懸松（陣跡）より原城跡方向



写真 2-6 鳩山出丸より黒田仕寄方向



写真 2-7 ニノ丸出丸より陣跡（本陣）方向



写真 2-8 ニノ丸より陣跡（鍋島）方向

第2節 社会的環境

1) 人口

南島原市の人口は、令和2年度の国勢調査に基づく統計で 42,330 人（男 19,598 人／女 22,732 人）である。平成 27 年度の人口は 46,535 人であり、5 年間で 9.0%の減少がみられる。また 65 歳以上の高齢者の割合は増加傾向にあり、令和2年度には総人口の約 40.4%となった(図 2-11)。

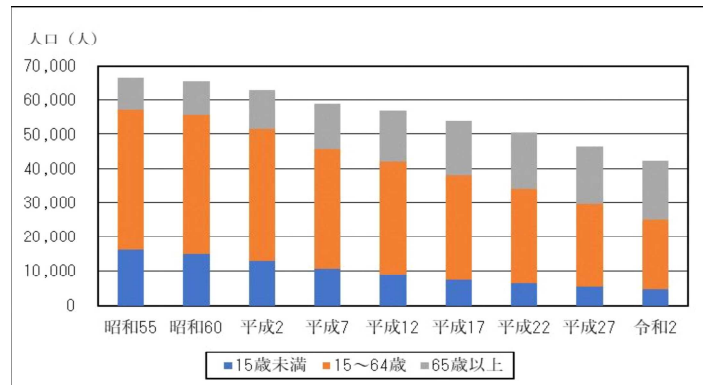


図 2-11 南島原市の世代別人口の推移

原城跡の所在する南有馬町の世代別人口の割合は、令和2年度には、15 歳未満は総人口の約 9.7%、15～64 歳は約 45.2%、65 歳以上は約 45.0%となっている。また、各調査年度における世代別人口の割合は南島原市全体とほぼ同様に推移しているが、高齢者の割合がわずかに高くなっている。

令和2年度における南島原市や南有馬町の世代別人口の割合を長崎県内や全国と比較すると、15 歳未満は、それぞれ 10%前後とほぼ変わらないが、65 歳以上の割合は、南島原市が約 40%、南有馬町が約 45%であり、長崎県内や全国と比較すると、やや高くなっている (図 2-12)。

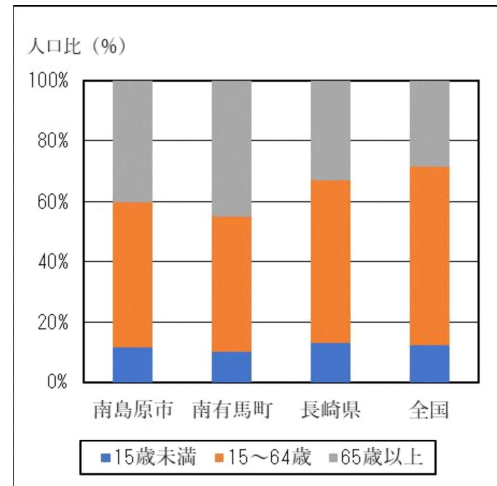


図 2-12 令和2年度世代別人口比の比較

2) 産業

南島原市の基幹産業は農業であり、主に生産されているのは馬鈴薯、苺、メロン、ミカン、アスパラガス、葉たばこ、肉用牛などである。また沿岸漁業を中心とした水産業も行われており、真鯛、カサゴ、オコゼ、タコなどが水揚げされる他、車エビ、ワカメの養殖も行われている。原城跡の周辺においてはトマトの生産、ワカメ養殖が盛んである。

商業における事業所数、従業者数、年間販売額とも近年は減少傾向である。

製造業では食品加工業が多くなっており、特に素麺の生産は全国有数の生産高を誇るなど、地域を代表する産業となっている。その他にみそ、しょうゆ、酒、みそ納豆などが特産品として生産されている。

3) 観光

南島原市全体の年次別観光客延べ数（図 2-13）は長崎県観光統計データに基づいている。平成 10 年頃、平成 24 年頃、平成 28 年頃に集計方法の見直しが行われており、集計方法の変更が翌年の大きな増減として表れている。平成 29 年以降は、やや減少傾向にあり、令和 2 年には新型コロナウイルス感染症の拡大の影響を受けて激減している。

原城跡への観光客数は、南島原市による統計で、世界文化遺産登録後の平成 30 年（2018）7 月から令和元年（2019）3 月までで 36,408 人となっている。登録による効果については、市内の観光ガイドのうち原城跡を含むコースを利用した人数、ならびに有馬キリシタン遺産記念館の入館者数で比較する。登録前である平成 29 年度はガイド利用者が 2,294 人、記念館入館者数が 12,500 人であったのに対し、平成 30 年度はガイド利用者が 8,262 人、記念館入館者数が 21,846 人といずれも増加しているが、令和元年度以降は減少傾向である（図 2-14）。

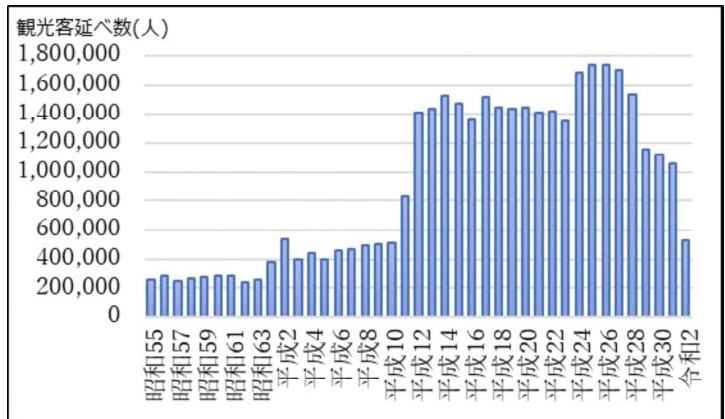


図 2-13 南島原市の年次別観光客延べ数の推移

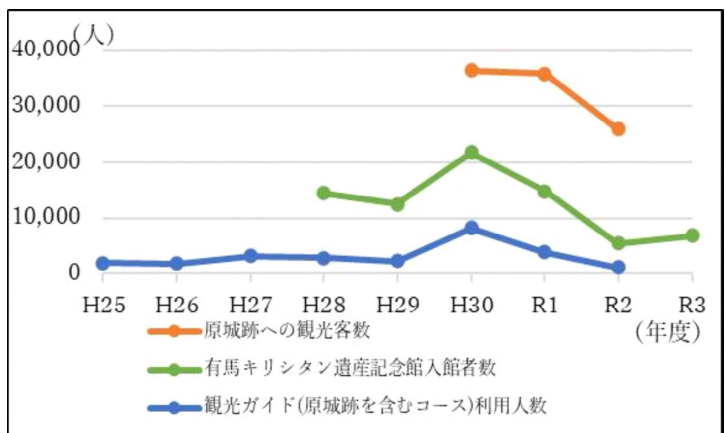


図 2-14 原城跡への観光客数の推移

4) 交通

原城跡への交通アクセスは、空路の場合にはバスおよび列車、陸路は列車およびバス、あるいは自動車の利用が可能である。また海路は有明海を挟んで対岸である熊本や福岡の 4 つの港からの高速船やフェリーが利用できる。

空路の場合、長崎空港から長崎県営バスで J R 諫早駅までで 40 分、そこから島原鉄道で島原駅までで 50 分、さらに島鉄バスを利用して 70 分である。

陸路の場合、J R 諫早駅から島原鉄道で島原駅まで 50 分の後、島鉄バスで 70 分、あるいは J R 諫早駅から島鉄バスを利用して 120 分である。自動車を利用した場合は諫早 I C から国道

57号および国道251号を經由して70分である。また広域農道である雲仙グリーンロードを經由するルートもあり、その周辺では高規格道路である島原道路の建設が進められている。

海路の場合は4つのルートがある。1つ目は熊本港から島原港まで30分ないしは60分、そこから自動車で40分か島鉄バスで60分である。2つ目は三池港から島原港まで50分、そこから自動車で40分か島鉄バスで60分である。なおこの航路は旅客輸送のみであり、車両の乗船はできない。3つ目は長州港から多比良港まで45分、そこから自動車で60分か島鉄バスで105分である。4つ目は鬼池港から口之津港へ30分、そこから自動車か島鉄バスで15分である。

公共交通機関を利用する場合は、いずれの経路を利用しても最終的には島鉄バスを利用することとなる。原城跡の最寄りのバス停は「原城前」であり、口之津港からの路線では「駒崎」や「原城温泉真砂」にも停車する。「原城前」バス停から本丸までは徒歩で15分程度である。

また、原城跡の見学のための駐車場を、国道251号線沿いと原城温泉真砂のそばの2か所に整備を行っている(図2-15、図2-16)。



図 2-15 南島原市へのアクセス図